



図70 空から見た上原遺跡



図69 遺跡の位置
5万分1地形図「弥彦」

上原遺跡 いわんぼろ
西蒲区竹野町

上原遺跡は角田山東麓の台地の中央部にあり、遺跡の範囲は東西一五〇メートル、南北二〇〇メートルほど、標高は約二八メートルである。遺跡の広がる平坦地は長らく野菜畑として利用されており、古くから石鏃が採集される所として知られていた。

昭和四十五（一九七〇）年、カキ畑の造成に先立って巻町教育委員会が二六四平方メートルを発掘調査し、縄文時代の竪穴住居跡や貯蔵穴とともに、たくさん遺物が出土した。図七一は土偶の一部で、胴の下半分と右足だけが残っている。遺存部の高さは約六・三センチメートルである。足の中ほどに小さな段があり、ブーツ（深靴）を履いたような形になっている。縄文時代の履物の様子を伝える全国的にも数少ない資料とされている。

上原遺跡でこれまでに見つかった石鏃は数千点に達すると思われる。また、角田山麓で作られた製品とは異なる石槍も見つかっている。図七二は漆黒の良質の黒曜石を加工して作られた長さ約一〇センチメートルの完存の石槍である。石材の黒曜石は、



図72 黒曜石製の石槍 個人所蔵

上原遺跡の発掘地の周辺は、昭和五十一年に巻町の史跡に指定され、新潟市の史跡に継承されている。また、深靴土偶と黒曜石の石槍は、巻町の指定文化財から新潟市の文化財に継承されている。



図71 深靴土偶 左、正面 右、側面

上原遺跡は縄文時代後期の前葉から晩期の前葉にかけて（約四〇〇〇〜二八〇〇年前）、連続的に営まれた集落の跡である。遺物の出土分布を見ると、平坦地の中央では疎らで、その周囲に多いという特徴があった。このことから、上原遺跡の集落は、広場を中心として、その周りに住まいが環状に巡る集落であったと考えられる。発掘された面積が限られているため、見つかった住居跡の数は四棟だけだが、全体で一〇〇棟以上あったことも考えられる。

北海道網走支庁の置戸産であることが近年判明した。実用品として作られた石槍が、遠隔地へ流通する過程で、持ち主の権威を示す貴重な威信材に変化したのであろう。